

2009 年巻頭言

慈恵医大小児科の将来展望

小児科学講座主任教授

井田博幸

2008 年 4 月 1 日に衛藤義勝教授の後任として第 7 代東京慈恵会医科大学小児科学講座主任教授を拝命したことを光栄に思うとともに、重責を感じております。我が小児科学講座は開講後 87 年の歴史を持ち、同窓数約 500 名、現役医局員数約 160 名を有する全国でも有数の小児科です。このような講座を発展させていくことが私に与えられた使命と考えております。そこでこの使命を遂行するためにはどのような方策が必要かを考えてみました。

まずは講座の理念として“和をもって尊しとなす” という聖徳太子の言葉を引用いたします。この言葉を私なりに解釈すると、一番目の“和” は平和の和です。平穏で安寧な組織が構築されればそこに所属する人たちの力が十分に発揮されると思います。二番目の“和” は調和の和です。コメディカルの方々や他科の先生方と協力して医療を行うことは現代医療には欠かせません。三番目の“和” は総和の和です。講座に所属する人、全員が一丸となり物事に当たっていけば問題は解決し、課題は成就すると思います。

そして私並びに講座のなすべき事は慈恵医大小児科の歴史と伝統を堅持しながら、現代社会のニーズに応える小児科医の育成であると信じております。この人材の育成を通して日本そして世界の小児医療を構築できればと考えています。医師の責務は病める子どもたち、そしてそれを支える家族に貢献することです。この **Faculty Development** の **Minimum Requirement** は医師としての使命感・倫理感、思いやりの心、十分な医学知識、研究マインド、**Communication Skill**、**Technical Skill**などを育成していくことです。これらに加えてリスク感覚、国際感覚、医学をサイエンスとして捉える感覚は 21 世紀の小児科医にとって重要です。これらを重点項目として卒前・卒後教育、診療、研究が行えるよう大学 4 病院、関連病院、研究班そして海外とのネットワークを生かし、講座全体を統合することにより **Faculty Development** を成し遂げていきます。

以上の点を基礎に置いて教授就任以降、実施した事業を列記いたします。

- ・教授回診の充実：形式的な回診ではなく、問診・身体所見・検査データを基にした的確な診断・治療ができる臨床力の養成及び臨床的問題点を論理的思考に基づいて解決できる研究能力の育成に努めています。さらに、大学附属病院のみならず、関連病院にも回診に出向いて講座全体の臨床能力の向上に努めています。

- ・個人履歴・業績調査：現役医局員が多くなり、各自の職歴、業績、希望などが多様化してきました。これに対応するため就職歴、発表歴、今後の目標などに関する調査を行いました。これを定期的に行うことにより、各医局員の方向性の設定及び各自の **bench marking** が容易に行えると考えています。

- ・病院業績調査：大学から医局員を派遣する際に各病院の業務及び業績内容を知ることは

必須です。これを明らかにするため各病院の業績、診療内容などについて調査を行いました。これを定期的に行うことにより、病院業績の **bench marking** 及び病院機能の **characterization** が可能になるとともに、得られた情報は医局員派遣の際の基礎資料として有用であると考えています。

・大規模臨床治験：大学 4 病院及び関連病院の臨床データは従来、講座全体で生かされることはありませんでしたが、今年度、臨床開発室の浦島准教授の支援を得て、“ビタミン D3 によるインフルエンザの予防効果” という大規模臨床治験を慈恵医大 4 病院、関連病院のみならず開業されている先生方、佐渡の岡崎先生の協力も得て実施しました。これを梃子にして今後も講座が一体化して行う臨床研究を実施していきます。

・UCLA との **Exchange Program** の締結：UCLA 小児病院との卒前・卒後教育の円滑化のため、**Exchange Program** を構築し慈恵医大の小児科志望学生や医局員の先生方にアメリカの小児医療を経験して頂き、人事交流をベースにして慈恵医大小児科の **globalization** を目指して行きたいと考えています。

以上が主なものですが、今後もさらに講座発展のため、種々の **visible** な事業を着実に実施していく予定です。前川喜平教授、衛藤義勝教授というお二人の先生に師事したことによって得られた総合力、学会・研究活動を通して得られた人脈、そして慈恵医大小児科で巡り会えた良き先輩・同僚・後輩のご支援を講座発展の原動力にしたいと考えております。

“人が人を診ることの難しさ・楽しさを実感できる慈恵医大小児科” と “同窓の先生方そして医局員一人一人が誇りに思える慈恵医大小児科” をキーワードにして皆様とっしよに慈恵医大小児科の発展に尽力いたしますので、宜しくお願い申し上げます。

2010 年巻頭言

マニフェストの検証と今年目標

小児科学講座主任教授

井田博幸

2008 年 4 月に主任教授を拝命して瞬く間に 2 年が過ぎようとしております。同窓会の先生方や医局員の先生方に支えられながら小児科学講座は順調に運営されております事をご報告するとともに、ご支援いただいた先生方にこの場をお借りして感謝申し上げます。

私の教授就任時、我が小児科学講座の理念として“和”を提唱いたしました。この概念を基礎に置いていくつかの事業を行いましたので、まずこれらを検証してみました。教授回診の充実ですが、これについては論理的思考に基づいた診断・治療、そしてカルテの記載はまだ十分に満足できるものではありません。しかしながら、これらは慈恵医大小児科学講座における医学・医療の基本ですので、諦めずに根気よくこの教育方針は続けていきたいと思っております。関連病院の回診は各病院の現状が把握でき、また医局員の顔が直接、見えるため私にとっては貴重な機会ですし、関連病院に勤務されている先生方も帰属意識・親近感・緊張感を保つことができるので継続していくつもりです。個人履歴・業績評価は医局員の先生方の協力もあり大多数の先生に提出して頂きました。今後の各人の卒後教育の目標を定める上で大いに役立っております。また、若い先生方には学会発表・論文作成をしようという動機付けになっています。臨床開発室の浦島准教授にご尽力いただいたビタミンDによるインフルエンザの予防の研究は約 500 名のサンプル数が集まり、英語の論文にまとめ上げるまでには至りましたが、まだ受理の段階には至っておりません。現在、受理に向けて鋭意努力中です。UCLA との Exchange Program ですが、昨年度は 1 名、本年度は 5 名の学生を短期留学させることができました。将来的にはこのプログラムを活用して医局員を留学させたいと考えております。以上のように、まだ、完全ではありませんがプロジェクトは徐々に開花しつつあると感じております。

以上の状況を鑑み、さらに慈恵医大小児科を発展させるために 2009 年度は“共有”をキーワードに設定いたしました。それは以下の 3 つの“共有”が“和”という理念を実現するためには重要と考えたからです。すなわち、情報の共有、課題の共有、成果の共有です。医局員が情報を共有することにより、お互いを理解することができます。“和”には最も重要な要素です。課題を共有すれば今後、我々が何を為すべきかが明らかになると思っています。これにより講座全体が底上げされると思っております。さらに成果を共有すれば各人のやり甲斐が生まれ、講座全体の目標にもなります。

2009 年度はさらに講座をレベルアップさせるため以下の事業を実施いたしました。1 番目のプロジェクトは研究支援です。まず研究補助員を雇用いたしました。慈恵医大小児科学講座が発展していくためには基礎研究の遂行は必須の事業です。最近臨床の仕事が忙しく基礎研究まで手が回らない事がどの大学でも問題になっています。そこで研究補助員を雇用し、医局員の先生方の負担を減らしました。現在は宮田准教授の研究を主にサポー

トしていますが、今後は希望する研究テーマがあれば順次、サポート体制を拡大していこうと考えております。また、医局のリニューアルに伴い使用頻度の減っていた研究室に PCR マシンを含むいくつかの研究機器を購入致しました。これら研究に関するプロジェクトの効果は直ぐに目には見えないと思いますが、将来投資として重要と考えております。2 番目のプロジェクトは症例要約システムの構築です。従来、教科書的症例は記録していませんでしたし、発表に値するような貴重な症例は各人が学会発表用に個別に保存・管理していました。しかしながら、慈恵医大小児科に入院し、診断をつけ、治療をした症例は講座の貴重な財産です。この基本的コンセプトのもとコンピューターシステムを用いて本院において、症例要約システムを 4 月にスタートし既に現在、26 症例のファイルが完成しています。今後、このシステムを関連病院にも拡大し、将来の卒前・卒後教育に活用しようと考えております。3 番目のプロジェクトはホームページのリニューアルです。宮田准教授の尽力により小児科学講座及び母子センターのホームページを 2009 年 4 月にリニューアルいたしました。これにより慈恵医大小児科で行っている医療を広く知らせることが可能になりました。また、講座の方針が明らかになり若手医師及び医学生が小児科学講座に興味を持つことにより入局者の増加が期待されます。実際、2009 年度に小児科病棟・外来を見学に訪れた医学生は 20 名前後と著明に増加しました。また、他の施設で研修し、入局される先生方は 4 名とこの効果は徐々に現れております。現在、同窓会の部分がまだアップされておりませんが、これを充実させ沼口先生が構築された慈恵医大小児科同窓会メールシステムと併せることにより、小児科学講座と小児科同窓会との関係が更に強固になると期待しております。

以上のように種々のプロジェクトにより慈恵医大小児科学講座は順調に船出をし、徐々に外海に出航できるような体制が整いつつあると考えております。今後は多少の荒波にも耐えられるような、そして大海原での航海ができるような強固な船体作りが必要となってきます。方針を決定する船長の責務は重大と考えておりますが、当然、船長一人で船体は動きませんし、正しい方向に向かわせることもできません。幸いにも慈恵医大小児科には多くの同窓会、そして医局員の先生方がいらっしゃいますので、“慈恵医大小児科丸” が正しい航路で、力強く航海できるよう、そして乗客・乗り組み員が航海を楽しめるよう皆様のご支援・ご協力を引き続き宜しくお願い申し上げます。

2011 年巻頭言

慈恵医大小児科における世代交代と今後

小児科学講座主任教授

井田博幸

主任教授を拝命してほぼ 3 年が経過し、徐々に講座の体制、方向性も固まりつつあると感じております。順調に小児科講座が運営されているのも同窓会の先生方、医局員の先生方のご支援の賜物と感謝申し上げます。

慈恵医大小児科は 1922 年に創設された伝統ある講座です。今日まで多くの業績を残し、優秀な臨床医を育成し、社会に貢献してきました。我々はその基盤の上に存在しています。しかしながら、昨年度から今年度にかけて、長年、小児科を支えてくださった 7 名の重鎮の先生方が定年を迎えられ退官、あるいは開業のため退職されました。先生方には小児科学講座の発展にご尽力いただきました。心より感謝申し上げます。この状況はまさに世代交代と言えらると思います。この世代交代をどのように乗り越えるかは講座としての大きな命題です。慈恵医大小児科の良き伝統を理解し、継承し、発展させていくことがこの解決策になると私は考えています。そして、この良き伝統とは **mission**、**profession**、**compassion** という 3 つのキーワードに集約されると思います。「小児科医の使命を全うする = **mission**」、「専門職としてのプライドを保持し、研鑽を積む = **profession**」、「慈愛の心を持って患者さんとその家族に接し、思い遣る = **compassion**」という 3 つの精神が慈恵医大小児科の伝統と私は理解しています。この良き伝統を日々の診療、教育、研究に生かすことによって世代交代を良い方向に導いていこうと考えておりますので、皆様のご理解、ご協力をお願いいたします。

さてここ 3 年間に行った施策により徐々に結果が出てきたものがありますので、そのうちのいくつかを以下に紹介いたします。

- ・ 臨床開発室の浦島准教授を中心にして行われた小児科内多施設共同研究が英文誌に掲載されました。小児科内多施設共同研究による論文は慈恵医大小児科では初めてであり、極めて意義深いものと思います。さらにこれ以外の臨床研究も現在、進行中ですので成果に期待しているところです。
- ・ 宮田准教授の努力で講座のホームページに加えて、同窓会のホームページができました。同窓の先生方には、是非、ご覧いただきたいと思います。この結果、同窓会と講座との距離が極めて近くなり、一体感が生まれました。そして、慈恵医大小児科の歴史や診療・教育・研究体制が理解され、多くの医学生、研修医が慈恵医大小児科を見学に訪れるようになりました。今年度はさらにホームページをバージョンアップしていく予定です。
- ・ 個人履歴・業績評価を行った結果、医局員が学会発表、論文発表の必要性を認識したため、その発表数が増加してきました。全ての学会発表が論文発表に結びついていないという課題はありますが、成果の現れと感じております。そこで今年度は英語の論文数を増加させるため講座と医学論文 **editor** とで契約を結び、英文論文作成をサポートするシステム

を確立しました。このシステムを用いて現在、6つの英文論文が完成しています。

・教授回診の充実や診療のレベルアップによって、昨年度は大学4病院の収支が初めて黒字となりました。問診を的確に行い、身体所見、検査所見から適切な治療方針を組み立てる事により無駄な検査・治療が行われなくなったことが一つの要因と考えています。今年度は医療制度改革により、さらなる収支の改善が期待されています。

以上のように慈恵医大小児科学講座はインフラ面では着実に成長しております。今後は更に慈恵医大小児科の存在を対外的に示していきたいと考えています。そのためには(1)診療を充実させることによって得られる優れた臨床研究の実施(2)教育システムの向上による優秀な人材の育成(3)臨床的視野に立った患者さんに還元できる基礎研究の遂行が三本柱であると考えられます。そして、得られた成果を論文に発表する事が重要です。慈恵医大小児科が一丸となってこれらプロジェクトを推進できるよう皆様と共に努力する所存ですので引き続きご支援・ご協力を宜しくお願い申し上げます。

2012 年巻頭言

慈恵医大小児科学講座のプレゼンスの向上

小児科学講座主任教授

井田博幸

2011 年は東日本大震災という大災害に見舞われた重い年でしたが、今年もこうして同窓会誌を皆様にお届けできる事は私にとりましても、小児科学講座にとりましても幸せな事と思います。震災に際して慈恵医大小児科学講座は宮城こども病院と被災された同窓の先生方に義援金を送り、また、福島にボランティアとして医局員を派遣しました。この活動に対して宮城県・岩手県の先生方から感謝の言葉を頂きました。発案・支援いただいた廣津卓夫小児科同窓会会長をはじめとする同窓会の先生方、そして原子力汚染の心配される中、福島で災害時医療に貢献していただいた飯島正紀先生、西野多聞先生、横井貴之先生と彼らが不在の間、診療業務をカバーしていただいた医局員の先生方に感謝申し上げます。

さて、“和をもって尊しとなす” を理念として講座を運営し、インフラ整備を行ってまいりました。その結果、新入医局員数の増加、学会発表の質の向上、論文数の増加などの **positive** 効果が認められています。更なる講座の発展のために“慈恵医大小児科学講座のプレゼンスの向上”を今後の中期目標として設定したいと思います。この目標を達成するには以下の事項が重要と考えられます。

まず、優れた小児科医の育成です。幸い、ここ 5 年間で約 50 名の新入医局員の先生方を迎えることができました。この若い先生方を教育し、育てていくことが大きなテーマです。私が掲げる診療の基本方針については医局会、教授回診などを通して浸透して来たので、今後は関連病院機能を活用して、患者さんの診かた、診療録の書き方、データの解釈などの教育を強化していきたいと考えています。このため昨年度に関連病院実績評価を行い、各関連病院の **activity** と各関連病院がどのような教育機能を保有しているかの調査を行いました。さらに今年度から新生児医療のルチンケアを若手全員が習得する目的で埼玉小児医療センター新生児科へのレジデント研修を開始する予定です。また、専門分野として唯一、二次支援専門病院が確立していなかった内分泌部門について、埼玉小児医療センター内分泌代謝科に派遣を開始する予定です。

質の高い研究の遂行とその論文化もプレゼンスの向上には重要な要素です。昨年度、研究班長会議を開催し、各研究班の現状と将来の方向性について意見交換を行いました。今後はこの会議を発展させ、各研究班が単独で行う縦割り研究のみならず、慈恵医大内の複数の研究班が協力して行う横断型研究の基礎を構築する予定です。幸い 2011 年は小児科学会総会での多くの発表が口演演題に選出され、海外学会での発表数も 10 題を超えるようになりました。また、教室賞を受賞した 6 編の論文全てが英語論文でした。このように **scientific** な面は徐々に発展しているように感じていますが、研究分野の更なる向上には慈恵医大小児科の伝統である **patient-oriented** な臨床を継続し、論理的思考に基づく問題解決能力、自分の考えを明確に発表し文章化する能力、欧米の科学者とも渡り合える **global**

standard な知識と英語力を含めた国際的センスの育成が重要と考えます。このため、医局会で研究の進め方や論文の書き方の講演や海外医学者の招待講演を開催するとともに海外留学を積極的に進めるという方策を考えています。

学会活動を通して慈恵医大小児科が社会的評価を受けることもプレゼンスの向上に重要なポイントになります。具体的には学会の要職に就くことや学術集会を開催することがこれに当たると思います。私の知る慈恵医大小児科の歴史の中で主なものだけ振り返ってみると、前川喜平名誉教授は日本小児保健協会会長、第 100 回日本小児科学会学術総会会頭を務められました。衛藤義勝教授は日本小児科学会会長、第 10 回国際先天代謝異常学会会長を務められました。これら二つの学会においては皇太子殿下の御臨席を仰ぎました。この事実は慈恵医大小児科学講座にとり記憶に残る大きな軌跡です。これら学会に比較して規模は非常に小さいですが、今年度は浜野晋一郎先生が小児神経学会関東地方会を、私が日本小児科学会東京地方会を開催いたします。来年度は海老澤元宏先生が日本小児アレルギー学会の、私が日本先天代謝異常学会・アジア先天代謝異常学会 **Joint Meeting** の会長に任命されております。このように学会活動も少しずつではありますが展開しつつあります。

10 年後には慈恵医大小児科学講座は創立 100 年を迎えます。この節目に向って“慈恵医大小児科学講座のプレゼンスの向上”を合言葉に講座が“和”の精神を基礎において診療・教育・研究に邁進し、小児科 100 年の軌跡がさらに輝けるものになるよう尽力する所存ですので同窓、そして医局員の先生方におかれましては引き続きご支援くださいますようよろしくお願い申し上げます。

2013 年巻頭言

We are Family, Department of Pediatrics, Jikei University School of Medicine

小児科学講座主任教授

井田博幸

今年もこうして皆様に慈恵医大小児科の同窓会誌をお届けできる事を嬉しく思います。2013 年 3 月末で私が教授を拝命してから 5 年が経過いたします。私としては初めの 5 年を **first step** と考えていましたので、一区切りがついたという感じでホッとしています。この 5 年間、小児科学講座が順調に運営されましたのも同窓の先生方、そして医局員の先生方のご支援の賜物と思います。紙面をお借りして先生方のご支援に感謝申し上げます。

さて、この 5 年間を振りかえってみますと 50 名の先生方を医局員に迎える事ができました。そして、4 名の臨床心理士の先生方を雇用し、大学 4 病院全体で 6 名の臨床心理士の先生方を配置しました。また、現在、本院では 5 名の保育士、2 名の研究助手を雇用しており人事面についてはほぼ満足すべき成果が上げられたと考えております。この多くの人たちの期待に沿うような将来構想を構築していく事は私の責務ですので、今後の舵取りを慎重に、かつ大胆に進めていこうと考えています。医療収支面については大学 4 病院全体収支をマイナスから年間 4 億円超の黒字に転換させました。この結果、慈恵医大小児科は良質な小児医療を提供するという社会的ニーズおよび大学の使命を満たすのみならず、財政面でも大学から重視されるようになりました。この業績を維持・発展させていくためには病-病連携、病-診連携が重要ですので慈恵医大小児科が一枚岩である必要があります。同窓の先生方におかれましては引く続きご支援・ご協力をよろしくお願いいたします。また、医局員の先生方におかれましては日々、研鑽を積んでいただき良質な小児医療を提供するようお願いいたします。学術面については学会発表数の増加、かつ質の向上が認められています。昨年アメリカ小児科学会において浦島先生の演題が **platform presentation** に選出された事、また、アジア小児科学会において飯島先生が **young investigator award** を受賞した事は国際的かつ学術的なプレゼンスの向上を示すと思います。ただ、論文という点ではまだ、十分な成果を上げているとは言えません。そこで、次の 5 年に向けて論文文化推進プロジェクトを発足させました。臨床的疑問を基軸においた研究、横断的視野に立脚した研究、慈恵医大小児科講座全体を活用した研究を基本構想として論文作成に努める事が今後の課題と考えられます。

教授就任時の新年会の挨拶で “**We are family, Department of Pediatrics, Jikei University School of Medicine**” が私の根底に流れる考えであるとお話ししました。教授就任後、5 年が経過し、私としてはこの考えがひしひしと実感できるようになってきました。すなわち、講座の長である私にとって若い先生方は子どものような存在ですので、ノビノビそしてスクスクと育ってくれることを期待しています。私と年代が近い先生方は兄弟のような存在ですので、益々、発展してほしいと考えています。そして先輩の先生方におかれましては父親のような存在ですので、いつまでも厳しく、そして暖かく私を見守っ

ていただければと思っています。

引き続き “We are family, Department of Pediatrics, Jikei University School of Medicine” を軸に小児科学講座を運営して参ります。同窓の先生方そして医局員の先生方におかれましては慈恵医大小児科ファミリーが益々、充実・発展するよう今後ともご支援をよろしくお願い申し上げます。

2014 年巻頭言

慈恵医大小児科の中期目標・中期計画

小児科学講座主任教授

井田博幸

この同窓会誌が皆様のお手元に届く頃は、それぞれ昨年を振り返り今年の目標をたてておられることと思います。講座として昨年を振り返りますと比較的、充実した年だったように思います。学術的には日暮憲道先生がアメリカ小児科学会の若手優秀演題賞を、浦島崇先生が日本小児循環器学会会長賞を受賞しました。学会関係では大石勉先生が小児リウマチ学会を、海老澤元宏先生が日本小児アレルギー学会を、私がアジア先天代謝異常学会・日本先天代謝異常学会 **Joint Meeting** を開催しました。学内人事では浦島充佳先生が分子疫学の教授に、大橋十也教授が総合医科学研究センターのセンター長に、私が慈恵医大理事・附属病院副院長に就任しました。学外人事としては斎藤博久先生が日本アレルギー学会理事長を、私が日本先天代謝異常学会理事長を拝命しました。以上のように慈恵医大小児科学講座の学内および対外的なプレゼンスが向上しているも同窓、そして医局員の先生方が講座を盛り上げようと心を一つにして努力して下さった結果だと思えます。講座の責任者として皆様に感謝申し上げるとともに誇りに感じております。

さて、2020 年に日本でオリンピックが開催されることが決定し、今後はオリンピック開催に向けて種々の目標・計画が発表されてくると思えます。そこで慈恵医大小児科学講座においても今後の中期目標・中期計画について考えてみました。

私が教授を拝命して以来、喫緊の課題であった **human resource** の確保に医局員一丸となり尽力して参りました。その結果、ここ 7 年間で 73 名の **Jikei Pediatric Family** が誕生しました。以上のような状況から第一の中期目標のスローガンは“人材：**acquisition** から **development** へ” としました。人材育成の最大のポイントは質の高い臨床教育です。幸い慈恵医大小児科学講座は多くの優秀な指導者と関連病院を有しています。これらを有機的に生かして人材を育成していきたいと考えています。そのためには病院-病院・病院-開業医の先生との連携を強化し、多くの患者さんの診療に携わること、各病院・各関連科のヘッドの先生が臨床・教育・研究においてガバナンスを発揮していただくこと、指導者の先生が卒後教育に熱意を持って指導にあたること、医局員一人一人が各自の臨床力の向上に努めることが重要です。

研究については DNA 研究所あるいは疫学研究室との連携強化、研究補助員の雇用、学会参加費・研究費のサポートなどの **seeds** を蒔いてきました。これからは研究成果を重視していきたいと考えています。そこで、第二の中期目標のスローガンは“研究：**seeds** から **outcome** へ” としました。研究報告会における討論内容を充実させ学会発表を論文化させること、研究プロジェクト委員会において各研究班の研究プロジェクトを吟味し、横の連携を強化すること、そして各医局員の研究進捗状況を確認し、論文指導をすること、論文作成プロジェクト委員会により論文発表数をモニターし、論文数増加の具体策を立案

し実行することが今後の施策として重要です。

教育については私が教授就任以来、卒前・卒後教育の重要性を強調してきました。卒前教育委員会を立ち上げ大学4病院全体で卒前教育プログラムを検討し、卒前教育を実施するとともに同窓の先生にはクリニック実習にご協力いただいております。その結果として小児科臨床実習は学生から高い評価を得ています。卒後教育に対しては若手医師向けの種々の講習会を開催するとともに医局会運営委員会を設立し医局会を活性化させました。更なる教育の充実のため、第三の中期目標のスローガンは“教育:awareness から assessment へ” としました。今後は医局会の内容を評価し、医局会の質の向上を図ります。レジデントによる病院評価を実施し、各病院の臨床教育の実態・質・問題点を明らかにし講座全体としての卒後教育の充実を進めていきます。さらに小児科学会指導医講習会への積極的な参加を促し、卒後教育の質を向上させていきます。

この6年間、初期目標はほぼ達成できたことを私は大変、嬉しく思っています。初期目標の達成は同窓、そして医局員の先生方のご協力・ご支援なくして成し遂げられなかったと信じています。従って、中期目標も皆様のお力添えになくしては成就できません。中期計画に基づいて慈恵医大小児科講座のプレゼンスをさらに向上させ、皆様が慈恵医大小児科に所属して良かったと感じていただく事が私の使命ですので引き続きご指導・ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

2015 年巻頭言

新病院建設に向けて

小児科学講座主任教授

井田博幸

教授を拝命して約 7 年が経過しました。私の任期は 13 年間ですので、在任期間の半分と少しが過ぎたこととなります。この間、講座が発展して来たのは小児科学講座同窓の先生方そして小児科学講座の先生方の支援・協力なくしてはなし得なかった事です。この場をお借りして深謝申し上げます。

さて、慈大新聞などご存知のように港工業跡地に小児・周産期を中心にした新病院が建設されます。2018 年 9 月竣工、2019 年 10 月オープン予定です。新病院の構成は以下のような予定です。1 階は小児・産科の外来部門、2 階は健診センター・検査部門、3 階は産科病棟 (34 床)、4 階は NICU (12 床)・PICU (8 床)・GCU (24 床) を主体にした小児病棟 (合計 64 床)、5 階は小児病棟 (45 床) です。

この新病院は慈恵医大における今後の小児・周産期医療を担う場所として極めて大きな意義を有しています。講座の責任者としてはこれからの小児医療の展望を視野に入れた新病院の構築はもちろんですが、人材育成をどのように進めるかが大きな命題です。大学病院における小児医療は遺伝性疾患・小児がん・先天性心疾患・超低出生体重児などのハードな疾患群と発達障害・不登校などのこころのケアを必要とするソフトな疾患群に双極化していくと思われれます。また、特定機能病院における小児科としては高次救急医療も重要な診療分野になると考えられます。今後、新病院で展開されるこれらの医療を担う人材育成の方策としては関連病院との人事連携をさらに強化し、包括的な視点を持った小児科医を育成することが最も重要と考えられます。それに加えて DNA 研究所・都立小児総合医療センター・埼玉県立小児医療センター・成育医療センター・神奈川県立こども医療センターに医局員を従来より多く派遣し、**subspecialty** 領域の卒後教育を強化するとともに附属病院麻酔科に医局員を派遣し、小児科専門医であり、かつ集中治療専門医である人材の育成を図っていきます。また、従来、慈恵医大小児科の弱点であった呼吸器部門については東京女子医科大学東医療センターに医局員を派遣して、気管支鏡のノウハウを学んでもらう予定です。また、消化器病学についても医局員に研鑽を積んでもらう計画をたてています。以上のような方策により慈恵医大小児科で行なえる医療の幅が広がっていくと確信しています。さらに小児領域の診療を発展させるには遺伝診療部、こころの診療部設立など大学病院における組織構築というグローバルな視点にたった考えも必要です。今後はこれら組織構築を具現化していこうと考えています。いずれにせよ小児医療は複雑化そして高度化していきます。逆説的ですが医療が高度化・複雑化するほど医学の基本が重要になってきます。私が考える医学の基本とは

- ・患者さんの悩みに耳を傾けそれを共有すること
- ・患者さんの抱える問題を解決していく基礎医学の知識/臨床能力をしっかりと修得すること

と

- ・医学上の問題点を研究により解決しようとする意欲と解決できる能力を養うこと
- ・得られた研究成果を患者さんのために生かす事のできる倫理観/人間愛を育むこと

です。以上のような慈愛の精神をもった **science-oriented** な医師が慈恵医大小児科で育ち、これに基づいた小児医療が新病院で行なわれることを願っています。

2015年4月には20名という開講以来最多の先生方が入局されます。診療・研究・教育をさらに充実させて“慈恵医大小児科に入って良かった”と医局員の皆さんが実感できるよう尽力する所存ですので、引き続きご支援・ご鞭撻をいただきますようお願い申し上げます。

2016 年巻頭言

慈恵医大小児科のさらなる発展を目指して

小児科学講座主任教授

井田博幸

今年もこうして小児科同窓会誌の巻頭言を同窓そして医局員の先生方にお届けできることを大変、嬉しく思います。私が教授を拝命して以来、診療実績・研究業績・人材育成などの講座としての重要な指標に関して着実に成果が上がっています。これも同窓そして医局員の先生方のご協力・ご支援の賜物と思います。紙面をお借りして感謝申し上げます。

さて、小児医療は大きく変貌しました。すなわち、小児の **common disease** であった気管支喘息、肺炎・髄膜炎・麻疹などの感染症、乳児下痢症に続発する脱水症などの死亡率・罹患率・入院率がステロイド吸入薬によるコントロール、抗生物質の進歩、ワクチンの開発・普及により激減しました。この変化により大学病院小児科や小児病院においては難治性疾患（小児がん・遺伝性疾患・先天性心疾患・超低出生体重児など）とこころの問題（不登校・摂食障害・発達障害など）が医療の中心となる両極化現象が見られています。そして、一般病院においては入院病床の稼働率を維持することが困難になっています。また、医療の進歩により重症な疾患や難治性疾患の子どもたちの予後が改善しました。この結果、小児がん・腎疾患・心疾患・神経疾患・染色体異常症・先天代謝異常症などの領域においては小児期に発症した疾患により、慢性的に身体・発達・行動・精神状態に障害を持ち、何らかの医療支援が必要な子どもたち (**children and youth with special health care needs**) が増加しています。また、慢性疾患を持って成人に移行する患者 (**adult patients with childhood-onset chronic disease**) も増加しています。

慈恵医大小児科がさらに発展していくために、このような変化に対応していく必要があります。(1) 治療から予防へ (2) 疾病から保健へ (3) 病院から地域への3つのキーワードが **health supervision** において重要と報告されています。今後は予防医学を熟知し、小児保健的な考えを持ち、地域に根ざした医療を展開できる小児科医、そしてこころの問題に適切に対応し、患児のみならず家族全体のことも考え、患児の将来像も予測して診療が出来る極めて高い総合診療能力を有する小児科医の育成が求められます。したがって、在宅医療・移行期医療・リエゾン・小児保健などを卒後教育の一環として加えることを検討する必要があります。一方、難治性疾患の診断法・治療法の開発のための研究を推進し、世界に発信していくことも慈恵医大小児科には求められています。このためには研究体制をさらに充実させていくことも重要です。

慈恵医大小児科は多くの関連病院と医局員を有していますが、時代に即した卒後教育体制・研究体制を確立するためには新規関連病院の獲得・既存の関連病院の維持の是非を考えるとともに、変貌する小児医療に対応できる臨床能力と若手を指導できる高い教育能力を有し、かつ研究計画を立案し、研究を指導し、論文作成ができる指導層を構築することが重要であると考えています。講座の力は個人の力の集合ですので慈恵医大がさらに発展

していくためには個人の成長も必須です。慈恵医大小児科の関連病院・研究体制・人員数などは全国のトップレベルの大学と比較しても遜色ありません。個人個人が伸びようとする意欲を持ち、どのようにしたら講座や社会に貢献できるかを考えることによって慈恵医大小児科の発展がもたらされると思いますので、医局員の先生方のさらなる奮起を期待しています。私は医局員の先生方と講座の将来に真摯に向き合い、ひとつひとつの課題に誠実に対応し、任務を実直に遂行することにより講座をリードしていく所存ですので引き続き皆様のご協力・ご支援をよろしく申し上げます。